

# なかまの キャンパス

「タケル君、息切れしてて苦しそうなんだ」

幼稚園などに出向いて、お医者さんごっこをする川崎医科大(倉敷市松島)の同好会「ぬいぐるみ病院」の練習の二こま。タケル君と名付けたクマの縫いぐるみを患者に見立て、子ども役の学生が症状を説明する。

その声にじっくりと耳を傾けていた医師役の学生が、笑顔で診察を始める。



ウィルス(右)を退治するのは、名付けて「免疫戦隊コールドバスターズ」(左の3人)。ストーリーを考案し、小道具も手作りする

## ⑭ 模擬診察(川崎医科大同好会・ぬいぐるみ病院)

# 医療子どもの立場で

「心臓の音を聞くと、痛の仕組みや健康管理の方法くないからね」「体に栄養を、やさしい言葉で伝授して養と酸素を送っているかい」。最後には、決まっただけの「タケル君は苦しいの願いが、そこに込められてい後に薬をあげてね」。体を頑張って治すから、菌をおろす。



縫いぐるみを「診察」する医師役の学生(右から2人目)。体の仕組みや看護の仕方を丁寧に伝える

＊ ＊ ＊

ぬいぐるみ病院の活動は、体や健康への興味、思いやりの心を養うとともに、病院への恐怖心を軽減するのが狙い。同様の取り組みが海外で盛んに行われていることを知り、同大の学生有志が集まって2010年夏に始めた。

現在は同大と川崎医療短大(同所)医療保育科の44人が所属。勉強会や練習を続けながら、年に1、2回のペースで幼稚園やイベントに出向いている。

「治療が体のために必要な行為だと分かってもらえるよう努めている」と代表の同医科大3年後藤信太郎さん(33)。「子どもが心臓の音を聞いたときに目を輝かせたり、本気で縫いぐるみの容体を心配する姿を見ると、や

ぬいぐるみ病院のメンバー。手にしている人体パズルや看板も手作り



っている」と、顧問を務める衛生学教室の大槻剛巳教授。「子どもが喜ぶ場面を知ったり、心の中で考えていることを捉えるのは、医師として重要な要素」とする。

発足時から所属している同大6年の杉原桃子さん(25)と井上葵子さん(23)は「『骨折』や『肝臓』といった当たり前の単語も、子どもには分からない。それだ

って良かったと思う」と手応えを感じている。「病院へ行くのが怖い」といった保護者の声が届くこともあるという。学生は模擬診察のほかに紙芝居を披露。8月下旬に行われた小中学生の医療体験教室では、白衣を着て医療器具を紹介するなど、子どもにアプローチする手法を増やしつつある。

将来の医療現場を支える学生たち。一人一人の子どもとの出会いが、大きな財産になっている。(水嶋佑香)

◇ 日曜掲載

＊ ＊ ＊  
ぬいぐるみ病院の問い合わせは、同大学生課(086-462-1111)へ。